



ノーブルス オブリージュ

Noblesse oblige

貴き者の責務

日本住宅公団初代総裁 加納久朗

ひさあきら

第十回

作家 高崎哲郎

「De Profundis(深淵より)③、戦争回避工作、メディア情報戦、ついに開戦」

昭和12年(1937)7月7日に勃発した日華事変は日中戦争の導火線となった。同年12月には南京、翌13年には広東さらには武漢の占領に戦線が拡大し泥沼化した。国内では軍備充実のため挙国一致の体制が叫ばれ、国家総動員法が公布された。統制経済を強化し準戦時体制となった。大蔵省(現財務省)、日銀、横浜正金銀行の財政金融3者は緊密な連携を樹立して非常事態に対処することを余儀なくされた。日英関係の亀裂は50歳のロンドン支店長加納久朗にも重くのしかかった。

東京朝日新聞の記事(12年10月14日付、現代語表記・以下同じ)は久朗への電話インタビューを掲載した。(同趣旨の記事はデイリー・テレグラフ(イギリス)、ワシントン・ポスト(アメリカ)の両有力紙にも報じられた)。

「英金融業者警戒」貿易確保の大作必要◇「本社・倫敦国際電話」支那事変勃発以来英国朝野は支那側の逆宣伝や歪曲されたる現地報道に影響され日本の行動及び真意を誤解して多分に反日的態度をとりつつあり、殊に最近ロンドン金融界の対日動向は多年の緊密なる日英金融関係に重大なる転換を示すものとして注視せらるるので、本社は古垣欧米部長を通じて(横浜)正金銀行倫敦支店長加納久朗子爵と13日国際電話を行い最近のロンドン金融

界の反日態度につき、その内情を左の如く打診した。

本社・加納さんですか、古垣です。支那事変勃発以来英本国の輿論は日本の行動に無理解のようで、特に財界金融界の態度が最近日本に悪くて日貨排斥とか対日信用取引の拒否というような対日経済断交の方向へ進んでいるように見えますが、この英本国の経済界の態度が直に英国の海外自治領に響きましてインドとか豪州、ニュージールランドなどの方面でも矯激な対日経済断交の実際運動に進もうとしているように見えますので、ロンドンにおいていになり特に財界、金融界と密接な関係を持つておいでになる貴下からその間の事情を詳しく伺つて国民に真相を知らしめたいと思います。

加納支店長・第一に日本の態度が最近英国に對して非常に非友好的になったとこちらに受け取られて、それがこちらのマーケットに敏感に響いて来たのです。上海戦開始以来ロンドン金融市場では日本に対する反感とリスクの警戒から相当圧迫を加えて来つつあります。これは要するに日本が戦争の初めに列国の權益を十分尊重すると言つておいたのに、その後損害賠償はしないといつているものと見て英国も気持を悪くして今日では日本に対して非友好的言動をやっているのです。こんな風では日英の過去60年の外国貿易を壊すことになります。日本は戦争に勝つことと同時に金

月6日、朝日新聞社の国産機神風号が立川飛行場を飛び立ち9日ロンドンに到着した。所要時間は94時間17分56秒。当時のアジア・欧州連絡の新記録といわれた。久朗は在ロンドン日本人会を代表し娘英子(ローザ)を連れて空港での歓迎式典に臨んだ。

式部長官・子爵松平慶民は、12年9月3日付の加納宛書簡で「此度の(日華)事変に付ては適當なる言葉を見出さざるに付何も申さず、只々あきれる位のものに候」と書き、9月21日付の書簡では、「御附武官などの言より察するにインテリ若手軍人に於ても日英提携は双方の利益なり、然るに英国側の方、より多き利益を得る故、日本が相当我慢をするも英国側より折れ来るならむ、財政の方はドウニ力成るだろう、と申す考え方の様に有之候」と伝えている。

同年5月、昭和天皇の弟宮・秩父宮雍仁親王が天皇の名代として、イギリス国王ジョージ6世の戴冠式出席のためロンドンを訪問した。日英関係もしばらくは安定するかにみえた。先の書簡では、秩父宮の訪英に供奉した松平が、秩父宮の御附武官周辺から側聞した軍人たちの日中戦争にあつたの対英観が記されている。日英協調の可否を握るのは、双方の現実的かつ経済的な利害の打算によるとの見方が示されている。ロンドンでの秩父宮接遇役をつとめたひとりが横浜正金銀行ロンドン支店長加納久朗だった。

イギリス国内で日本製品に対するポイコット運動が起こった。クリスマスチャンである久朗は一計を案じアングリカンチャーチ総本山のカンタベリー大僧正に宛て「日本品ポイコットに對して慎重なる配慮を祈念する」との親書を奉呈している。同時に彼は日本の経済的立場をロンドンの政財界で積極的に説明し、イギ

リス側が極東情勢を冷静に理解するよう求めることも忘れなかった。大阪朝日新聞の10月20日付の記事は「英の邦品抑制が我が支進出に拍車、英国王立国際問題研究会で加納正金支店長日本の立場を闡明」との見出しを掲げ、加納が以下のように語つたと報じている。「重工業に転換せんとする日本にとり市場ならびに原料獲得のため北支が必要なること、および共產主義を防止せんとすれば日本は国防線を北支まで拡張せざるを得ぬが、これは恰もイギリスがその国防線をラインにありとしていゝのと同様である。これらは日本の膨張力の発露の表現であつて日本はこれを平和手段によつて達成せんとしたが支那の抗日政策で日本の意図は遮られた。さらに日本の支那進出に拍車をかけたものはイギリスで、日本商品が海外にのびんとすると、イギリスは常にその抑制策を講じ、日本を支那に向けしめた。この事態は好むと否とに拘らず認めるべきであらう」

イギリスにとつての利益線がライン川にあるのと同様に、日本にとつての利益線は華北にあるのだとして、防共の観点から日中対立を説明している。それ以前の数年間、帝国内での保護貿易に傾斜したイギリスとの間で、日本は数度の貿易摩擦を経験してきたが、そうした過去をイギリス側に思い出させようとしている。久朗は単なる対英宥和派ではなかつた。彼の対英説得(メディア対応)に感激した重要人物の中に首相近衛文麿がいた。近衛は久朗に直ちに電報を打ち「那家の為ご尽力感謝に堪えず今後もよろしくお願い申し上げます」と謝意を送つた。

林銑十郎内閣において外務大臣をつとめた非戦論者・佐藤尚武は、11月7日付の加納宛書簡で「一旦衝突起こりたる上は事件不拡大は余程困難に有之、小生は乍不及慮溝橋事件の如き衝突突生前に今一度別の立場より支那

融上にも貿易上にも従来の地歩を確保することを工夫せねばならないと思います。このことを国民に認識させる必要があります。しかしイギリスは政府としては何ら具体的に支那を援助しているということはありません。皆プライベートにやつてゐる次第です。本社・どうも倫敦金融市場の気分は非常に日本に悪く支那に同情を表しています。これは支那に多大の權益を持ちその權益が侵害されることを心配して色々な行動に出るわけでしょう。

加納・そうですね。それからもう一つは、最近に日英感情の悪化が互いに反映しあつてます。其傾向を強め、こういう情勢が進めば何時国交断絶というような最も望ましくない事態が発生するかも知れないという懸念から金融業者が非常に敏感になつて来ています。私の言葉は少し強いけれども今申したような趣旨が国民に理解されれば幸せと思います。とにかく各方面ともこの際、国際関係についても十分考慮しなければいけません。こちらではもしロンドン市場で日本の金融が行き詰るようなことになれば、日本の対外貿易進展上ゆゆしい大事であると憂慮してかかる最悪の事態を防止する方法を講ずべく考慮している次第です(以下略)

久朗は進んで新聞の取材に応じている。彼はメディアへの積極対応を国際情報戦の有力な手段ととらえている。(これより先、同年4



首相近衛文麿の加納宛電文(宮町教委「加納家史料」)

と会談を試み、北支問題解決の端緒を開かんと祈念せるものに有之、幸に中央部の意見だけは完全に纏まり出先きに徹底さすべく努力中、外交問題とは懸離れたる内政問題にて総辞職と相成…」と伝えている。佐藤は、現地での軍事衝突を避けようとした自らの日中問題解決にかける外交努力が内政的な要因で挫折してしまったこと、事件が起きてしまった以上不拡大の困難なことを痛恨の念を込めて書いて来た。

駐日英国大使クレイギー(Sir Robert Craigie)と久朗の間には内密に相互連絡があつた。昭和12年2月まで日本銀行総裁でその後は貴族議員であつた深井英五とクレイギーとの間に交わされた談話の内容について、久朗は談話を知り得る立場にいた。深井は10月7日付の書簡で「クレイギーとの面談で」種々談話を交換致し候。日英外交の爲めに喜ぶべきことと存じ候」と加納に報じている。同様の深井・クレイギー会談の内容は、12月21日付の加納宛深井書簡からも確認できる。一方、クレイギーも11月2日付加納宛書簡で、ヒューゲッセン駐華英国大使負傷事件(日本海軍機による大使誤射事件)に對する問題についての加納の尽力に感謝し、事変の早期解決を望む旨を書いて寄こしている。

第一次近衛内閣の文部大臣・厚生大臣であつた木戸幸一宛での加納書簡に注目したい。久朗が遠くロンドンに暮らして軍部の横暴に危機感を募らせ日英関係の改善に心を砕いてい

※ 中国の北部。華北(中支は中国の中部。華中)

たことが明確に伺えるからである。木戸と加納は頻繁に私信をやりとりしており〈極秘電〉も少なくない。英文でカモフラージュしたとみられる書簡もある。13年4月12日付の私信では「木戸大兄、加納久朗（横浜正金銀行ロンドン支店支店長（支配人）） 日支平和は、よき人生観と確たる哲学を有する大政治家のみ出来ることだ。軍人には出来ぬ。宜敷頼むぞ」。加納は国際決済銀行経済顧問ヤコブソン博士の「日中戦争観」をタイプに打って書簡と共に木戸に送っている。同文のタイプ印書は、近衛文麿・吉田茂・大久保利賢（横浜正金銀行頭取）にも送られた。

同年8月13日付の書簡は伝える。「木戸大兄、加納久朗 蘇満国境事件が拡大しなかったのは誠に幸いなことであった。御尽力を深謝する。漢口攻略を以て是非一段落つけねばならぬ。軍人だって日本の実力が分かったことだろうと思うし、そう無茶をやつて過去30年間に築き上げた日本の経済的地位を逆転させる様なことは望まないと信ずるから、漢口を以て statesmanlike な態度を以て戦を打ち切り、速かに建設的計画に入って貰い度い。近頃の日本は小技術者集合体だ。Madon のある大政治家乃至実業家の力が全くない。小智慧ばっか

しでは国家を動かし、国際生活の仲間入りは出来ぬ。北支、中支の幣制だの、第三国利権通商の妨害だの見ては居られぬ。全て小智慧者のやることだ。北支中支には実業界の大人物、例之、深井英五氏、児玉謙次氏、平生鈺三郎氏、中根貞彦氏と云う様なはつきりした人生観を持った、そして斯界の権威者を出して貰いたい。そして大所高所から大ざっぱにずばりずばりと処理して貰いたい。門戸開放、機会均等と云うからには、約束通りそれを実行して支那に於ける真の共存共栄をやらねばいかぬ。大阪辺

り、商人工業家中には、支那に於ける英国の商権発展を阻止することが日本の進出になる様に云う奴もあるが、それはほんとうの目先の議論で、大局そんなものではない。宇垣外相と『クレ（一）ギー』大使との日英交渉により、そばから日英間の案件を片付けることは緊要だ。英国と戦つて日本の国運をもう一度賭すると云う様な出鱈目な考えの無い限りは、絶対に日英協調で行くべきだ」この間、加納は国際金融分析に関する専門的な論文を書いた。「英国金本位停止前後に於ける印度の経済事情」を『通貨制度研究報告第一輯』（通貨制度研究会）に、「英国戦時経済の基本動向と今後の見通し」を『世界戦争経済の基本動向』（日本外交協会調査局）に投稿した。著書『戦時世界経済の諸問題』（日本経済連盟会）を上梓した。

駐英大使吉田茂の無二のパートナーが久朗だった。『評伝 吉田茂 中』（猪木正道）から一部引用する。「吉田大使が英国側を説得するため日本の国内事情を持ち出しているからには、機密（外交覚書）の漏洩は文字通り生命とりになる惧れがあった。吉田茂は機密の保持が日英会談の成否を左右するものと考え、この件に関する文書は一切大使館員に見せず、自分一人で処理していた。

ある日、吉田大使はプロトコール役（儀典担当役）の三宅喜二郎外交官補に、机上の書類を整理するよう命じて帰宅した。三宅官補が雑然とした書類を整理していると、吉田大使の『覚書』が見付かつてしまった。寺崎二等書記官がこの書類について質問した時、吉田大使はびっくり仰天したといわれる。そのうちどこから漏れたのか『モーニング・ポスト』紙に、日英会談の記事が出た。その時も、吉田大使は跳び上がるほど驚き、早速、大使は

の商人工業家中には、支那に於ける英国の商権発展を阻止することが日本の進出になる様に云う奴もあるが、それはほんとうの目先の議論で、大局そんなものではない。宇垣外相と『クレ（一）ギー』大使との日英交渉により、そばから日英間の案件を片付けることは緊要だ。英国と戦つて日本の国運をもう一度賭すると云う様な出鱈目な考えの無い限りは、絶対に日英協調で行くべきだ」この間、加納は国際金融分析に関する専門的な論文を書いた。「英国金本位停止前後に於ける印度の経済事情」を『通貨制度研究報告第一輯』（通貨制度研究会）に、「英国戦時経済の基本動向と今後の見通し」を『世界戦争経済の基本動向』（日本外交協会調査局）に投稿した。著書『戦時世界経済の諸問題』（日本経済連盟会）を上梓した。



吉田茂の久朗宛はがき（吉田は駐英大使を離任し帰国途上、一宮町教委「加納家史料」）

日本側の人物は『モーニング・ポスト』への漏洩問題で記者の取材源になったのではないかと推測される横浜正金銀行支配人の加納久朗子爵である。加納子爵は4分の1世紀近くイングランド銀行総裁の任にあったモンタギュー・ノーマンとも親交があり、吉田大使と英国金融界とのパイプ役となっていた。吉田茂は岳父牧野伸顕（大久保利通2男）夫妻に、雪子夫人の入院と手術とを報せた手紙の3日後、昭和12年8月26日付で、岳父夫妻にもう1通の手紙を出している。3女和子の婚約に関するものだ。『（前略）前信申し残し候は、媒介人として松本健次郎氏と先方希望の由、小生は同氏には面識あるのみなるも、もちろん結構と存じ候。なおまた結納取り極めの日、取り替わしの日は、吉日を選ぶ習慣につき、加納氏のところにては日本にて取り極め、日本および英国にて同日に取り替わし、ロンドンにては加納氏において取り運びくれ候由に候。この点は先日申上げ落ち候につきここに申上げ候。恐縮ながらよろしく御話し願ひ上げ候、先は右の所用のみ申し出で候。頓首」。令嬢和子が麻生多賀吉（久朗の甥）と婚約することになった。多賀吉は九州麻生財閥の御曹子である。久朗がロンドンで媒酌人の役割を引き受けた。

昭和13年の近衛内閣による「爾後中国の国民政府を相手とせず」との「大失態」（久朗）の声明により日本外交は混乱の度を深め国際的孤立化の瀬戸際に立った。日本の政界や軍部の支配層の中にはドイツやイタリア（ファシスト国家）と手を結ぼうとする勢力が台頭してきた。外交官吉田茂は中国問題について強硬派ではあったが、英米との決裂は絶対に避けるべきである、とする英米協調派であった。吉田と共同歩調をとったのが国際経済人加納

（交渉相手の）サー・R・クレイギーに対し『私の意見では、本国政府と一切を相談するため、私自身ができるだけ目立たないような形で日本に帰る時まで完全に機密を保持するのでなければ、到底成功の見込みはありません』と英国側も機密の完全な保持に努めるよう申し入れている。昭和11年12月7日クレイギーは『大使の率直な話しぶりは、もし漏洩が起こった場合に文字通り致命的となりうるから、この会談は東京へ公電で伝えないよう提案する。この記録の写しを『機密親展』としてサー・R・クライブ大使のもとへ個人的に届けるのが一杯と思う』という意見を書いた。このタイプライターで打った記録には、肉筆で次のような註がついている。『漏洩に関しては、吉田氏は本人自身が考えているほど機密保持に熱心でなかったように思えてならない。『モーニング・ポスト』の記事を書いた記者は、日本大使館の晩餐会で、（大使館員ではない）有力な日本人からこの情報を得たと称している。』

右の『有力な日本人』というのは、当時横浜正金銀行ロンドン支配人として、英国政・財界で高く評価されていた加納久朗子爵ではなかったかと推測される。加納子爵は吉田大使にきわめて近い親英派の自由主義者で、金融・経済問題について大使の顧問格であった。恐らく大使館の晩餐会で、加納子爵は持前の磊落さから、日英接近工作について言及したのであろう」

「吉田大使の日英接近工作は、ネヴィル・チェンバレン蔵相とウォレン・フィッシュャー大蔵次官との2人を中心として進められたが、その背後には日英双方あわせて3人の重要人物がいた。英国側は言うまでもなくリース・ロス大蔵省顧問であつて、彼を中国に派遣して、幣制改革を推進させるという案に吉田茂が重要な役割を果たした。

久朗であった。「外交と金融とはその性質を同じうする。いずれもクレディット（信用）を基礎とする」。吉田茂が久朗に贈ったことばである。14年10月吉田茂は駐英大使を免職となり同年暮に帰国した。以後、彼は特別の役職には就かなかつた。岳父牧野伸顕などを通して宮中内部や政界に働きかけ、日独伊三国同盟を阻止するため英米派として活動した。陸軍大将宇垣一成を首班に擁立しようとした行動もその一環であつた。一方、ロンドンに残つた久朗はイギリス政財界人との接触を深めていった。吉田の駐英大使時代には共にイギリスの親日派に働きかけ、吉田の帰国後はイギリス政財界の動静を書信により通報している。

15年8月下旬から、ドイツはロンドンに猛烈な爆撃をくわえた。特に9月8日夜からの爆撃は激しいものであつた。横浜正金銀行ロンドン支店の近くにも数発着弾したが被害は軽微で済んだ。同年11月24日、英米協調・戦争回避を訴え続けた元老西園寺公望が他界した。享年90歳。西園寺は国葬をもつて遇された。16年12月2日、久朗は東京市（当時）の医師村田資光の次女幸子と再婚する。幸子は32歳、在英日本大使館に勤務していて久朗と知り合つた。結婚から6日後の12月8日、日本国内では朝7時、ラジオ放送が臨時ニュースで「帝国陸海軍は今8日未明西太平洋に於て米英軍と戦闘状態に入れり」と報じた。朝6時過ぎに内大臣木戸幸一は侍従武官から電話で起こされて、海軍がハワイを攻撃したことを知らされた。「11時40分より12時迄、（天皇

『私のロンドン記録（My London Records）』（加納追想録、原文英文）で久朗は記す。「1941年12月8日月曜日は悲劇的な日であつた。日本と英国の間に戦争が勃発した。私はプリンセスゲートの自宅マンションを午前7時に出て9系統のバスに乗りシテイ（勤務先）に向かつた。私はオフィス（ロンドン支店）に着くや否や、10人の日本人部下を部屋に呼んで、この時期の最も重要なことは「健康と品位だ」と全員に伝えた。私は英国人の部下や使用人（併せて60人、30人は既に軍隊に入隊していた）に「極端に悲しい事態が、私の意に反し、また私の動きに逆行して発生してしまつた」と伝え、彼らに過去の友情や支援に感謝し、平和な時が早く戻るよう祈りたい、とも伝えた」

太平洋戦争突入後、横浜正金銀行のニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、シアトル、ホノルル、ボンベイ、カラチ、カルカッタ、シドニーの各支店が閉鎖された。ロンドン支店はドイツの対英攻撃と対日資産凍結により国際金融の中心地から外れて機能しなくなった。

（参考文献）千葉県一宮町教育委員会蔵「加納家史料」、「加納家史料目録」加藤陽子様論文、「吉田茂書翰追補」（財）吉田茂国際基金、「千葉県史研究 第14号」、「評伝 吉田茂 中」（猪木正道、「横浜正金銀行全史」、伊藤恵子様（ロンドン在住）提供文献、「木戸幸一日記」、国立歴史民俗博物館資料。

（つづく）。



再婚した加納（ロンドン時代、左が幸子夫人）

再婚した加納（ロンドン時代、左が幸子夫人）